

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾 ニュース

カレー作りを中断し、友人にも帰ってもらい、一人考え込むT。
悔しさを押し殺し、考えた末、親友のSに電話をかけます。
同じ地区出身の仲間として、共に部落問題学習に取り組んできたSにとっても、その電話はショックでした。
二人は慰め合いながらも、これまでの学びをふり返り、励まし合います。
そして、Sは言います。

「やっぱり親に言った方がいい」

それが、部落問題学習を通して、家族のありようや友達との関係性、部落民としての生き方について語り合ってきた結果でした。

Sの言葉に落ち着きを取り戻したTは、家族が囲む食卓で、その日あった出来事について話しはじめます。
決して何の不安もなく口にしたわけではありません。

一度は、

「こんなことでみんなを悩ませるのはバカらしい。こんな思いをするのは自分だけで十分だ」
そう思ったくらいなのですから。

話し終わったTに母が応えました。

「何でも困ったことを話せるのが家族じゃない」

その言葉に安堵し、Tに勇気が湧いてきます。

「そんなことを言う人は悲しい人。そんなことに負けてはダメ。世の中そんな人ばかりじゃない。落ち込んだら負けよ」

母の言葉に眼を見開き、Tは再び顔を上げます。

家族の言葉に励まされたTは、その夜、二度とかかってくるはずのない電話を深夜まで待ち続けます。

絶対卑怯だ。言いたいことだけ言って、電話を切って。

今度かかってきたら、もっと話したい。会って話がしたい。

差別者の意識を変えるのが、僕の解放運動。

このことを、いろんな人に話していこう。

一度は口を閉ざしかけたTが変わりはじめます。

翌朝、Tはこの日の出来事を、「生活ノート」という日記に記し、教員に託します。

この出来事は、学年全体学習の資料として共有されることとなります。

人は、本人に責任のないことで、その尊厳を著しく傷つけられると、どうなるでしょう。

人間性がゆがんでしまってもおかしくはないのではないのでしょうか。

そんな一面だけを切り取って、ガラスの向こう側から批判する人もいます。

「人間不信」、それは、決して彼だけに起こりかけたことではありません。

誰にでも起こりうることです。

彼がそうならずすんだのは、正しい学習があったから。

一本の電話ができる仲間がいたから。

たったそれだけ。

たったそれだけのことが、大切な命を救うのです。

本気の人権学習は、——「すべてを変える」

うずしおランチ代表